

# 賢女の手習新曆

## 第一

擧もその後凡そ三百五十四ケ日の始め。

年に輝く天赦日静けき風の復(吹)日に霞

の衣鬼(着)宿目。民の納めは萬倍日。御

代にかしづく大明(名)日。神によしとや

伊勢曆。三島曆の文字ふとき。柱曆の動き

なき。オロシ和國の春こそうあらたなれ。

でや君が代六十餘りの賢王圓融院の法皇

は。薨が洞に遁れ下りさせ給ひながら。叡

慮を四海にめぐらしおさく君を補ひ給へ

ば。御政事の露國土を潤し。さながら醍醐

村上の。跡を追はせ給ふかと。賤が伏屋の

假睡にも。枕の都あがまへて。フシ足を向

けても臥すことなし。既に長徳元年平且

の。スエテ御殿の氣色げさやかに錦の幅額玉

簾御格子几帳も注連繩の。フシ穂長の色を

讓葉や。奥は十二の御局に。去年の若水打

汲み初めて。オラシ初白粉のわか水や。不老

不死てふ藥酒。女松男松を門の前。スエテ白

洲にきしる五緒車。下馬に嘶く春駒に月

御雲客袖くらべ。院の拜禮奏すれば左右の

官女侍女くわどの屏風を押遣りて。諸卿

少々舞踏して天顔をフシ拜し奉る。大内山

の粧ひは世にたゞならぬ御作法なり。愛

に參議菅原の輔正は。今年八十五歳朝に杖

つく齡を越え。和漢の博識なりけるが。玉

座近く畏り謹んで申さるゝは。それ大君の

字内をしろしめされ。民安全に治まる事月

日の運行日夜の往來の時を遠へぬ政事に習

はば百世といふとも知んぬべし。さりなが

ら貞觀この方の曆宣明曆を用ゆて數百年

に及び候推歩天と違へり其の故は。一年の

日數大小の増減三百六十四分度の一つに割

り四季土用を考へ其のあさすを以て減日没

日と稱す時一利那の間髪一筋の違

ひめ。積りて四百年の内に三日の違ひ

と成り候これ。宣明曆の誤りなり。臣つら

つらはを鑑み今大統曆を以て授時曆に改

め。億萬劫を経るとも變らぬ國の曆を作

り。奏覽に供へ候。萬歳樂とぞ奏せらる。

院敬感限りなく繰返し觀覽あり。けに春

秋の節變り土用八專吉日忌日。方角日取の

細やかさ古き曆に勝りたり。いでく天下

に普く人をして明らむべしと。御書所に仰

せて梓に刻み。公卿大夫國民にオラ下し

給ふぞ。有難き。重ねて關白兼家を召

され。此の新曆の表月蝕の事。東國にて未

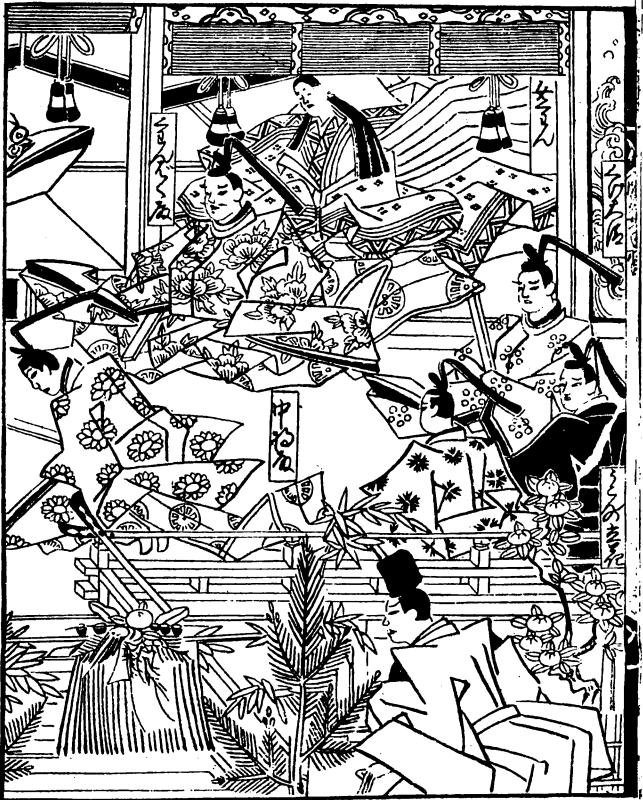
だ満たす西國にて滿つるとあり。僅か日本

の内にさへ月日のめぐり東西の差別あり。

後代の鑑なれば急ぎ東西に勅使を立て曆に

合せて天地の運行を考ふべしと。關東へ

は左中將藤原の實方に仰付  
 けられ。陸地傳馬の御判を  
 下さる。又西國へは三位別  
 當安國に勅詔あり。則ち海  
 路船手の御判をなし給ひ。  
 はやとくくとの御事にて  
 入御ならせ給ひければ諸卿  
 さやく追風にさらりく  
 と捲き下す。御簾の房や紅  
 の雲井の春こそ三重へゆた  
 かなれ。フシさる程に。三  
 位別當安國は我が館に歸り  
 郵黨を召集め。亦さても此の  
 度改りたる曆を東西にて引  
 合せ月日の運行をうかやは  
 んとして關東へは實方中將。  
 西國へは某に參れとの院宣  
 これ一生の迷惑なり其の故  
 は先年某太宰の少貳にて下  
 りし時筑前の住人菊池先生



道清といふ者を。不慮の口  
 論にて某手にかけて討つてあ  
 り。彼が所縁我を狙ふと聞  
 きける故。實方を賺し西國  
 へ遣し。某關東へ下らんと  
 思ひ。陸地と船地の御手判  
 を差換へて得させよと様々  
 にたらしめども實方更に承引  
 せず。敵の國へふかくと  
 下らんは如何にしても危な  
 もの如何はせんとぞ仰せけ  
 る。落合忠太罷出で。御尤  
 至極せりはや實方は關東の  
 門出に。攝州天王寺へ參詣  
 し直に東に下る由遅なはり  
 ては詮もなし。跡を追うて  
 是非々々懇望遊ばされよ是  
 非承引致さずは何の生冠者  
 輩。君と我等が四つの眼で  
 一睨づつ睨めたらば 愚よも



や否とは言はせまじと手に取るやうにぞ申上ぐる。いしくも言つしものかなと實方の跡を慕うて取る物も取敢ず津の國さしてぞ三重へ下りける。フシさる程に。左中將實方は例稀なる物使を蒙り。東に赴く門出に都の恵方に當れりと。芽ひ蘆の難波寺。天王寺にぞ参らる。頃は陸月の中つ頃まだ冴え返る初空は。春ともいさや白雪の振袖しやれて品あまる。二八餘りの上臈の乳母らしきを誘ひて。勝鬘山の愛染の御寶前に繪馬を掛け南無や愛染明王。三年の念願願はくは。成就圓滿なし給へ。スエチ自ら盡さすやと。フシ涙を。流し禮拜し。稍下向とは見えけるが。雲雪に野は暮れて袖打拂ふ

る其の有様。フシ戀を含みてほしやくと。此の世の人とは思はれず實方も心くれうかと。見とれておはせしが。下人の見る目如何とも思はず側につくと寄り。日こそ多けれ此の夕。佛も多きに愛染を。しみじみとの御祈誓。殊に繪馬は放れ駒。戀の重荷を乗せてやる我馬方と罷成り。繋ぎとめても見まほしや此の傘に入り給へ。奈落迄も御供とスエチ袂に。すがり宣へば。顔打赤め片頬に少し笑窪のため息に。心はせきて見ゆれども乳母を憚る氣色にて。いや左様の事にて候はず心中に深き望の候て斯様に參詣仕る。御心ざしは嬉しけれども若い殿卿と相傘は。あだ狂ひとや人言はん。フシ許させ給へとほのめければ。實方重ねて。いやこれ其方も此方も物詣人が何といふべきぞ。殊に某は此所の案内知らず。傘貸し申せし代りには此の堂塔の仔細を語り聞かせ給へ。さあいざくと傘の會釋あどなき品形。袖濡れませう此方へと傘

の柄共に持添へて締めつゆるめつ凭れつ寄りつ。語る名所もふるひ聲しどろ。もどろに三歩まる。天王寺名所。石の鳥居の。代々ふりし雪の深山を今爰に。靈鷲山とも。フシ眺むべし。釋迦如來轉法輪所。當極樂土東門中心。そもく。地此の額と申すは。小野の道風が筆の跡願ひを西にかけまくも。スエチ希しや山越しの。彌陀の御顔を拜むなる。不斷香の。蕪は空にむら紫の。ムフシ雲より朱の通廊にオウリめぐれやめぐれ五重の塔常樂我淨の朝嵐さつと誘へば軒の寶鐸らんくと。フシ二六時中に絶間なく。舍利禮讚の法の聲。金堂講堂六時堂。石の舞臺は極樂の歌舞の菩薩を待ち顔に。小忌の袂を纏すスエチ彼の伶人の波返し。涅槃の調有難や濁りに。フシまぬ蓮池の。鯉鮒は緒振りて。フシ石龜ねぶる水の。投げ煎餅や撒き能煎を。争ひあさるさざら波。青海波の泡沫は。フシ八功德池の眺

とちよこく。走り淺黄の鼻緒しをたれて。極は餘所目を取づれども乳母は何の色もなくはね上ると掻取すればはてよいわいのと恥しさうに。芭蕉の蔭に立寄りて赤面した

を語り聞かせ給へ。さあいざくと傘の會釋あどなき品形。袖濡れませう此方へと傘

を語り聞かせ給へ。さあいざくと傘の會釋あどなき品形。袖濡れませう此方へと傘

めかや。龜井の水のせゝらぎに。流れもあへぬ橋は。經木の後手向草。弘誓の海と頼もしく。まだ總角の。兒櫻十六歳の御姿。四十二歳の御束帯。フシなほ有難しと。禮拜石。引導石や影向石靡きく。て。なよ付の葉末は同じ。フシ深翠。二股付の。契りこめたる引裂紙で。雌結ひ雄結ひの諸結び。手に繰る珠の十五社や。和光の塵に交はりて

小オクリちりやへちりくちりやたりの宮柱。太しき立てて二王門。阿吽の臆念怒の勢。殊勝にもすさまじく。心の鬼も怖ぢぬべし。衣になづく狛犬の四つ足門を眺め捨て。はや煩惱の眠を覺す。黄鐘調の鐘の音を。聞けば其の日のやつ。こらやきとも。

なるをいの。聞けば別れの。フシ鶏は物かは。折る人つらしと。惜みけん守屋櫻の目も遙に。彼岸櫻の夕至や。暮より暮に色添へてばつとときめく人心。フシ目なれぬ軒の名を問へば。福圓満の。寶堂いやまだ文殊樂師堂。戀ぞ積りて子安堂。フシ覺を並べて立ち

給ふ扱又南に庚申。めせやくお土産召せく。うなる兒の四つ五つ。六つ七色は雪の色葩煎。フシ櫻葩煎。花を挽木の茶臼山。有柄が山や。坂松山。安井の宮は春園けて入日を洗ふ西の海。戀を深めて語るにぞフシ岸に生ふてふ姫松の。根問ひくとひのかね言に。はや雪晴れて空暮るゝ心の糸をフシ苧環に御縁あらばの捨詞。あとになりては猶見送り先に。なりては又見戻りよれつもつれつ歸らゝ長き妹背の初めとは。後にぞ思ひ知られける不思議なりける契りかなとて皆人。感ずるばかりなり。

世を秋風に吹きかへて葎葉の里におはします。菊池太刀丸と申すは幼少の時父の道清を三位安國に討たせ其の敵討たんとて老母姉君諸共に心つくしを忍び出で。柴が軒端の愛き住ひフシ貧しく暮す營みに。乳人の足井平馬の丞身をやつし野邊に出で。朝

菜蕪をあさりつゝオクリやうくはぐくみ奉る。母上侍兼ね走り出でやれ。平馬之丞。扱も姉の瑠璃姫は勝臺山の愛染に。敵を討たせて給はれと月夢の願をかけ。昨日早天に出でけるが。いつもは早く歸りしに斯く夜更ぐる迄歸らぬは。只事にてはよもあらじ如何はせんと宣へば。平馬聞きもあへず。扱もく大事を持つたる御身に天氣遣はし覺束なし。御迎ひに參らんと松明點し太刀おつ取り。斷出でんとせし所に瑠璃姫歸り給ひける。是はく人と人々は悦びさゞめき。何としてかとありければ雪は降り来る日は暮るゝ。せん方もなき折ふしに。あれなる殿の介抱にてこれ迄送り下されしと。語りも果てぬに人々は扱大膽やして其の方様はいづくにまします。先づ御禮を申さんに。此方へ是へと實方をオクリ奥にフシ。請じ奉り。賤しき者を御介抱遊ばされ。御陰にて夜道恙なく有難き仕合と禮儀正しく申さるゝ。實方御覽じ痛み入りた

第二

る言葉かな。幸ひ夜も更け  
 候へば家來共は何方にも宿  
 らせ。某ばかりは此の詫び  
 たる住居珍しく明かして行  
 かと宣へば。太刀丸おと  
 なしくかゝる高位の御座所  
 に。勿體なくは候へども仰  
 はいかで背くべき。お寢間  
 にもお居間にも、まじりかた 葦引園あしひきふ  
 此の間。松の焚火を一種  
 にて召させん物も長き夜を  
 明かさせ給ひ候はば。本望  
 に存じ申さんと芹の羹あまのり麥の  
 飯。心をこめてもてなせば  
 御供の人々は思ひ〜に宿  
 を取り我も〜と、三三 休  
 みける、フシかくて瑠璃姫。  
 是何をがなと思すれども。  
 貧しき身なれば酒参らせん  
 便もなく。我が身は遊あその破



僅かの酒を買ひ調へ。御肴に何かせん。マせめて一つとすゝめらる。地置方一つ受け持ちて。如何に方々。山路の酒の假枕情わりなくもてなしは身にも餘りて覺えたり。さていづれもは何人ぞ。打見には山賤の剛れて優しき振舞の。彼方を見れば弓卷。糸緋緋の鎧もあり。干菜かけたる庭もせに一輪開く白梅も。心にくけの住家いかさま由ある風情なり。其の昔こそゆかしけれと。エナ世にしみくくと宣へば。馬平馬涙をはらはらと流し。忘れて年を經しものを思ひあへぬ御尋ねに預り候ものかな。







よ。く〜と撫でさすり。フシ  
 身を頼はしておはしける。  
 包み兼ねつゝ實方紙燭に  
 照す戀路の闇。枕屏風を中  
 垣に。これなう。く〜とあ  
 りければ。姫は初心にもて  
 なして。何ぞ御用の候か。  
 女子どもの寢所へ遠慮も會  
 釋もなむ枕。しや打ちつけ  
 なと獨りごち。起きて往な  
 んとし給へば。實方裾を引  
 止め。宵の情に絆されて只  
 一筋の戀草を。分ちもあら  
 す來りしに。思ひの外の他  
 人ぶり。なほいとく〜しし  
 んぞ一夜はお許しと。続  
 り。ついてぞ口説かるゝ。  
 姫しけん〜と打眺め。身は  
 歎ならぬ蟹小舟ほの字とあ



れば自らもお嬉しうは候へども。仕様もやうもあるべきにかゝる女の寝姿に否と言はせぬ御仕掛エ、あられもないあの淫蕩な目のわいの顔打振りし面ざしは、誰も命は惜しからじ。さればさこそ思ひつゝ、我と我が身を諫めても。心の駒の綱切れて胸もせかれて来しものを寢もせでほんに此の儘で、戻られうか往なれうか。情知らずめつれなしと凭れか、れば振放し。又取付けば、おかしやんせそれは君様の御誤り譚ある身やら御存じなく。人の心も量はでしこなし顔の御忍び。男自慢か粹だてか。歸らせ給へと衣引被き、やをら静まり臥し給ふ。實方今は呆れはて思ふが故に散亂しいへば言葉の葛の葉のうらみ受けんと思ひきやつれなき松の宿り木も根なし葛は生ふものか。廣大慈悲の愛染に。千日萬日詣うくるとも。却つて地獄の種となり戀て死したる男の一念猛火となつて其の身を燒く。つれなき女の身の果見て。其の時思ひ

を晴らさんと立歸らんとし給ふ時。極するすると走り出で兩の袂をしかと取り。其のお言葉がつゆ恐ろしくはなけれども。今日見せめし初櫻根からいらる殿なれば。弱みを見せじと偽りにもたせかけたる我が心。いふも恥かし言へばえな。どうもくばかりにて。涙になり給ふ。方少しくせませせて。夜中に人の袖引くは近頃聊爾千萬と。振切つて歸らるゝ、放ちはやらじと又引止め。眞實いやか。はていやとは誰か岩代の。松の木折りにたよると引つ引かるゝ神枕のべのうがひに。床ぬれて顔と顔を打合せ。渡りくらべし思ひ小川小石川ころびようてころびくろ初音の烏鐘も厭ふな厭はじ解

て下りしが橋本の宿に着き。急の者ぞ馬借らん馬を出せと罵りける。馬方ども聞きも入れず。今日は勅使のお通り故どなたの御意でも馬借す事はならぬと空囀いてぞるたりける。安國大きに怒り。勅使にもせよ何にもせよ此の安國が通らんに何條事かあるべき。粗言つかば中間どもあれがて叩け。承り候と飛んでかゝり散々に打擲す。然る所へ太刀平馬走り來つて兩方へ押分けこれこれ。さては何れも様子を御存じなされませぬな。此の度實方中將殿公用あつて關東へ御下向なされ候故道中傳馬滞りなく相通し申せとの御手判これにあり。拜見あつて方々おとなしく通られよと。錦の袋より勅印を出し拜ませらる。本より安國これ望みの事なれば賺して取らんと思ひ隠敷に立寄つて。扱々左様の事とは聊か存ぜず狼藉を申したり。此の上は誰か違背申すべき。して各は實方殿の御家來か。いや

くな解かじなひつたり。濡れたるそのなか申すばかりはなかりけれ。

なかに申すばかりはなかりけれ。

### 第三

く。つれなき女の身の果見て。其の時思ひ

なかに申すばかりはなかりけれ。

なかに申すばかりはなかりけれ。

に御宿召されしと。言ひも果てぬに安國はつと思ひちやくと思案をめぐらし。ム、扱は菊池先生道清の一子よな承り及うだり御邊親の敵は其の實方の中將よ。以前太宰の少貳といつしなり。此の度西國へ下るべしとの御宣旨なりしに其方達がつけ狙ふ由を聞き無體に御訴訟して扱關東へ下るぞや。敵と知らず宿を貸し返討に逢ひ給はん。命知らずや笑止やと。誠しやかにぞ語りける。太刀丸平馬之丞聞きもあへず目と目をきつと見合せ。こは有難き御知らせこれ佛神の御加護なり。御禮は重ねて申すべきと言ひ捨てて驅出づる安國抑へてしばらくく。御邊が宿をする上は最早射止めた鹿なるぞ。せいては事を仕損せんとつくと心を落しつけ本望を遂げられよ。扱其の持たれたる御手判に血を觸れ汚す事勿體なし。某預り申すべし。侍のかういふ上は我も引きは致すまじ。跡に控へて下人ど

の楯なるぞと勇め立つれば兩人は。悦び私宅に歸りしはうたてかりける。次第なり。かくて兩人は。息をばかりに立歸り先づ瑠璃姫を傍に招き。新様々々の様子にてあの客人こそ敵なれ。数年の恨みを今宵ぞ晴らし申さんに悦び給へと申さるれば。瑠璃姫はつと興さめて暫し返事もなかりしが。稍あつて涙を流しあゝあさましき事を聞くものかな。近頃恥がしき事ながら敵とは夢にも知らず。情深くのたまひし故本望を遂ぐる便と思ひ假の契りを自らと二世迄の契約し。堅く誓を立ててあり。さりながら討たではまた道立たず。討てば又言交せし一言のあだとならん口惜しや。尤も不義とは言ひながら妾夫婦となる上は御身とも縁者なり。父の爲に敵ながらも聲ならずや。敵を討つも道を立てん爲なるに。道に背きて討つ事は。本意にはなるまじき。あはれ身がな二つぼし

きに口惜しの我が身やな。如何はすべきあさましやと或は嘲ち或は恨み。口説き給ふぞ道理なり。太刀丸もあきれ果て扱々是非なき仕合今更悔みて益もなし。さりながら其の御契りは内證づく。兎角討たではかなひ難し御思案あれと申さるれば。妾も左様に思ふぞや其の儀ならば今宵の内

に契約を戻し縁を切つて他人になり涼しく敵を討つべきに。今宵一夜は待給へと理を盡して宜へば。いかにも今宵ばかりは待申さん若し落つる事もあるべきに。必ず必ず油断すな密かに。此方へとオウらまづ傍にぞ入り給ふ。かくとは知らず實方は太刀丸平馬之丞が氣色變りし面魂。如何にしても心得がたし必定彼奴等は此の所の強盗なるが。我を欺き太刀装束を剥ぎ取らん。謀と覺えたり。汝輩やみくとは取られじと。外面の庇に立隠れ上には真柴引被

き。事の様子を。見給ひける。夜も

習手

賢女

の

賢女

更け行けば。太刀丸姉の案内待兼ねて。勇  
 心を一筋に槍おつ取つて差足し。妻戸に  
 立寄つて大音上げ。如何に太宰の少貳宵に  
 我が名を語りしに。用心もせず寢入りしは  
 若輩者として侮るか。天命何とて通るべき。

覺りてや早や落失せて行く方なし。定めて  
 御身が心には妾が戀にほだされて親の敵を  
 通せしと蔑まれんも恥しく。母上様にも平  
 馬にも何とて面が合されん皆我が心一つぞ  
 と思ひ詰めての覺悟ぞや。冥途にまします

て某を敵とは證據やある印やあると。詰め  
 かけ給へば平馬居直りこれお公家今更陣す  
 るは卑怯。段々證據は三位別當安國殿よと  
 いへば中將聞きもあへずからくくと笑ひヲ  
 ヲさぞあらんと思ひつれやれ。思案しても  
 見よ某誠の敵ならば夜前御邊が昔語を聞

九州の住人菊池先生道清が一子太刀丸親の  
 敵覺えたかと障子越しにはたと突く。手應  
 して血煙ばつと立つ。やれ仕澄したり嬉し

と思ひ討つて本望遂げよえ。あゝ苦し目ま  
 ひや。止めを刺してくれよとて、聲も惜

きながら。うか／＼と此の所に逗留すべき  
 ものか又それ迄もなく郎黨共に申付け返討

やと呼はり給へば母も悦び走り出で。小躍  
 してぞ立ち給ふ。すかさず止めを刺せやと

答なかりしが。エ悔むまじ人に恨みは更に  
 無し。我佛神に見放され侍冥加に盡果てた

にも討たすべし。何の思案もなく人の詞を  
 證據に親の敵を討たんとは是ぞ誠の盲討と

て障子をさつと引明くれば南無三寶瑠璃姫  
 の右手の肩先突通され朱に染みてぞおはし

る時實方物蔭より飛んで出で暫し／＼との  
 たまへば兩人はらりと取廻し。除すまじき

いふものぞ。これ御邊が狙ふ太宰の少貳と  
 いつし者は其の安國よ。狼狽者と大きに恥

ます。母は途方にくれ給ひ。やれ太刀丸お  
 事は氣ばし違ひしか姉と敵を取違へ侍とい

と反を打つ。中將少しも騒がすいやこれ聊  
 爾せられぬ。實否を糺し討たるゝ道ならば

ちしめ給へば人々目と目を見合せて。赤  
 面したるばかりなり。瑠璃姫今は力を得な

はれうか。情なや悲しやと、抱き付きて  
 ぞ泣き給ふ。瑠璃姫苦しけなる聲にて。

と縁を切らんと致せしが未だ諸天も捨て  
 う中將様左様の事は存せず情なやおの様

給はぬか何事も御免あり太刀丸に力を添へ

いや太刀丸に科はなしこれ皆妾が誤なり。

神妙に討たるべし。先づ暫くと押鎖め。扱先

と。縁を切らんと致せしが未だ諸天も捨て

いかに太刀丸宵にもそちに言ひし如く敵と  
 知らで契りし故。恩愛の縁を切つて後妾も

敵として狙ふよな。太刀丸は若輩者にもせよ

安國とやらんを討たせてたべと手を合せ  
 涙ながらに宣へば。中將も納得あり心

共に討たんと思ひ是迄は来りしが敵は

五

二人



〆 夜もほのくくと明けければ既に橋本の軍破れ杖柱とも頼みつる平馬之丞の討死し。敵安國は關東へ押下りしと聞くよりも。母上や瑠璃姫は、エチ呆れ果てておはしける。地姫君仰せけるは中將様や太刀丸はなほも敵を狙はんとて行方知らずなり給ふと承る。あるにかひなき我々が何とて此の儘候ふべき。いざや東へ忍びて下り。叶はぬ迄も敵をせめて一太刀と志し候と、涙ながらに宣へば。母もさこそは思ひつれ。いざく忍びて出でんとて。旅の草鞋菅笠や。杖に切らんと吳竹のよをこめてこそ、  
 〆 出で給ふ。



戀慕流しや。れんほれ、つえ。明足駄の笛に來る鹿はた、ハルヒ一方の、コシ思ひぞや。戀と歎きを荷ひてぞ。涙の玉の瑠璃姫も。オクリ身さへ細りて二重の帯、フシ三重四重五重九重を。餘所にすてつゝ行くととも。露のわけある旅なれば。コシせめて慰む心あり老いたる母は何故と後姿をつくぐも、エエ、見上げ見下す影老けて笠うなだれて杖つきのの、字や誰が手習に、ハルヒいろは散りぬる音羽山末ほのぐらき山かつら城鳥の聲こもる關の杉むら立越えて。コシ里の往來も我が中も。橋がなければ渡られぬ潮多の



水上御覽せよ。あれくよその嵐を帆に帆  
にかけて。風が漕がする渡舟。露引結ぶ

草津の宿軒打つ雨に。窓荒れて。玉もり  
山のいさら水。ホオケリ落ちて。流れて文織る

や。波の響の高宮川にさらす晒布の。さら  
さらに。はかなき戀に身をさらす。やれ名

を晒す。さらば浮名を流しもやらで。何に  
かゝれるさゝがにの。いとほしといふ人も

なく。こと問ふものは山彦や。ホオケリ谷に木  
をこる小野の宿とよ。摺針峠の細道。ハルッ

身はつたなきに薦かづら葛の裏吹く秋風  
に。宿の簾をばんば(番場)とあけて旅行

く人をちよいと招く。招く手許は。ふはふ  
は。不破の關彼の野邊の。薄が。我を招

けば。露打ちこほす關が原。かさか  
さ被ぬか笠寺に木の葉散り。池鯉鮒の宿

小夜の。中山小夜ふけて。更けて砧や字  
津の山濁れる世にも清見寺。三保の入江の

夕づく日松の葉越しに。眺むれば梢に。船  
を漕ぎ寄する。波か霞か。いや富士の山何を

薪に雪を焚くらん薄煙。見ぬ唐國の仙人も。  
戀路に通や失はん峯白。妙の愛鷹

山尾花が袖の鎌倉山分け行く末は武藏野の  
露の宿。花の古枝を笄に。黒髮山の白雲は。

露の宿。花の古枝を笄に。黒髮山の白雲は。  
けに山姫の薄化粧。旅の憂き寝の殖生に

も。見し面影は添ふれども。枕並べて寝ぬ  
辛氣さつさ。笹の葉や。根笹熊笹笹の。

端山繁山。しげけれど心に。道を分けさせ  
て。日數經ぬれば。秋風の波の白河尋ね

越し。いつか故郷に歸る身の。袖に重ね  
ん錦戸や伊達の薄着の衣川。音には遠く聞

きしかど今日に千賀の鹽竈の煙に結ぶ松山  
や。足びきしをる籠が鳥。圍うとすれどま

ばらなる。月のためには外の濱。とある磯  
邊に。着き給ふ。

痛はしや。親子の人渺々たる外の  
濱はより先は船もなく岩打つ波はとうく

として。鳥獸の鳴く聲も人の詞も聞き馴  
れぬ憂きが上なる物思ひ。目も當て

られぬ風情なり。然るに母上長の旅路に  
氣を破り。五體に風を引入れて今を限りと

見え給ふ。姫は悲しみさまんに。御額  
を抱へ足手を膚に温めて。わりなく看病し

給へども薬ととも荒磯の。潮を口に注ぐ  
より。術こそなかりけれ。今を

限りの御母上。堪へがたき氣色にて如何に  
はふらさず。命全く今一度。中將殿や太刀

丸にめぐり逢ひ。敵を討つて自らや父上の。  
後世の光を掲げよや。平馬之丞は討死す。

頼む蔭には中將殿。子供が行方を偏に頼み  
奉ると。最期迄も遺書しと細やかに傳へて

たべあら名残惜しの瑠璃姫や。なつかしの  
太刀や。南無阿彌陀佛とばかりにて。四十

餘りの春の夢朝の霜とぞ消え給ふ。姫はと  
かうの辨へなくはつとばかりに抱きつき。

前後も分かす。泣き給ふ理。せめて。  
哀れなり。かゝる所へ松前より昆布若布

を荷ひたる商人ども出で来り。此の由を見



るよりも。するくと立寄りて如何なる人ぞと問ひければ。さん候自らは都方の者なるが仔細あつて母上諸共是迄迷ひ来りしが。習はぬ旅に疲れてや遂に空しく成り給ふ憐み給へ人々とエテ伏沈みてぞ泣き給ふ。商人ども是を聞き扱いたはしき事どもかないざく取置き参らせんと。邊の木の葉取集め母上の御死骸をヨリ無常の煙と云なしにけり。姫は涙の下よりも。なう方々は此の島の人なるか。爰をば何といふ所ぞ若し此の邊へ都より。殿上人のさすらへ下り給ひし人を知り給はぬかと問ひ給ふ。浦人聞いて。爰は津輕合浦とて



日本の内なれども國を隔てし離れ島都人は  
來る事難しさり乍ら此の二三箇年以前三位  
別當安國といふ者。帝の御判を持來り。東夷  
を従へ今は蝦夷が島へ渡り。彼の島の王と  
成る。其の後彼を討たんとて藤原の中將實  
方菊池太刀丸といふ人忍びて下りまします  
由。其の外に都人の。來りし事は聞及ば  
ずと。語り捨ててぞ通りける。姫君辛  
さいや勝り是迄の陸地さへ生きたる心地な  
かりしに。蝦夷とやらんは名も知らず。剩  
へ母上には離れ參らせ此の上は。如何成る  
べき悲しやと。又平伏ては泣くばか  
り。せん方もなき風情なり。か、つし  
所に俄に荒風颯々として。霧横たはる木の  
間より。影の如くに黒の駒。一文字に飛び  
來り。姫の袂をくはへつゝ。背を差向けて  
居たりける。不思議に思ひ見給ふに。故  
郷にて勝鬘山の愛染に自ら畫きて奉りし給  
馬の駒の氣色なり。扱は疑ふ所なく明王の御  
加護にて。導き給ふと嬉しさの。信心魂に

微つて。口に眞言呪を唱へ。眼を塞ぎ夢と  
もなく。現心に駒引寄せゆらりと乗れば  
自ら。翼生ぜし如くにて風に嘶えて。歩  
みける。己れと勇ひのりの駒。彼の周  
穆の八匹の蹄に任せ翔り行き。四荒八極に  
到りしもさぞと思ひしら波の國の果しや外  
の濱。遙に過ぎて見返れば。雲江漢に横た  
はり。來つらん方も思ほへず。先は霞に籠  
々と。太虚にゐたる雁がねも。袂になつ  
く心地せり。見上ぐれば天近く又見下せば。  
地遠く手に取る月の片破は。わかれても水  
の底にありけり荒磯海。青海原の際もなく。  
弓手やいづこ名に聞きし磁石の山や北  
斗の濱。日を見ぬ島の暗きより。是を夜國と  
いふとかや。馬手は南海限りなく。男早  
りの女護の島。戀といふ字はよも知らじ。  
らせんきまんの國遠く。越より。外の島  
山を。足蹴に眺め行く空の。駒の嘶き龍  
の吟。雲起りては風達々と。打つ波引く波  
さつゝ。響の響障泥の音。雨にたく

へてどうくと。乗り静めては鞭を當て  
引廻しては乗り戻りくるり。くくるく  
と。東風に障る諸鎧。心に障る雲もなく。  
駿馬に任せ打つ程に。江南江北邊際なく。  
滄溟暗々として雲に續く眼に遮る山もなく  
天にかゝれる日月は。海より海に没する  
かと。茫然安閑と現なく。磯吹く嵐は濱の  
真砂を捲上げ。捲下し。西に飛入り  
雲を分け。凡そ萬里の空裡をば刹那に馳せ  
て行く程に。爰に雲路のとだえあり。暫  
く手綱がいくくりて聲をかけて打つ程に。馬  
は四足を縮めつゝ難なく向ふに。飛び  
あがり又しづくと勇み行く。達磨大師  
は。蘆の葉にのりの方便是は又。描く馬の  
蘆原や難波の寺の勝鬘山。愛染明王愛敬の。  
信心奇特の其の驗。過現未來未曾有。神變  
自在の生佛とは是なり只これなるはと拜ま  
ぬ。人こそなかりけれ。

## 第五

「そもく、蝦夷が千島といつば、良に當つて一千餘里を隔て。此の國に生ずる者自然に通力自在を得て。振分髪逆まに生ひ眼の光あかねさす。朝日に向ふ如くなり。怒れる

聲は忽ちに百獸の身の毛を縮めたり。山野の獸魚族を擱み裂き。旨酒美女に耽つて淫樂肉陣の遊びをなす。放埒無法の異國なり。さるにても三位別當安國此の島に

到つて彼の勅印を戴かせ。我日本の王孫なりと偽りしかば。鬼神に横道なしかや島の夷等悉く歸伏し則ち島の大王と崇め。數千の眷屬打従ひ圍繞渴仰斜ならず。今日も

濱邊に立出でてすなごり遊び居る處へ。痛はしや姫君は。早離速離が心地して寝れ果てたる旅衣立煩ひてぞおはしける。

「東等は是を見つて扱もみめよき女かな。いざ大王へ捧げんと引つ立て御前に出でける。安國きつと見て此の二三箇年日本の女を見ざる故いとなつかしう思ひしに。出かしたりく。あれこそ

日本の濡れ者といふ者ぞ是へくと招き寄せ。何として此の所へ來てあるぞと問ひければ。瑠璃板涙の隙よりもさん候自らは。繼母の讒に浮名立ち空舟に乗せられて。行方もいさや白波に捨て流されて候が。命

つれなく是迄ゆられ寄り候憐み給へといふしほの目元に餘る其風情。眠れる花の如くなり。安國いよく腰を抜かし。道理此の上は某が一の妃にそなへ活計に飽かすべし。扱眷屬共に打向ひ汝等は無人島へ漕ぎ渡り猪狩して遊ぶべし。それくと

いひければ承りて眷屬共。舟しつらへて乗出す其身は姫を伴ひて。急ぎ私宅に歸りしは運の極めと。思ひきや。我が敷島の道ならで。浮世の中の浮世歌のせ

て二人が連吹は湘浦の澤の斑竹思ひ。寝てもさめても忘れぬは妻の行方や敵の末。忍びてやつす蘆笠に墨の掛絡袷袷黄

無垢。浦々國々行き巡り。蝦夷が島にぞ着き給ふ。實方仰せけるは如何に太刀丸

是は聞及ぶ蝦夷が島扱も敵安國は。此の島の大王となりたる山あれに見えたる岩窟こそ彼奴が住家と覺えたり。眷屬數多あるべきに早まつて仕損すな只たばかつて打取れ

と。とある所に立忍び暫く時をぞ移さる。かくて安國姫君を伴ひ其の外女房召集め。晝夜酒宴に明かしける。今日も終日飲みくらし如何に姫。餘り酔ひて正

體なし圍に入りて休むべし。御身は是にて女房共と遊ばれよ。如何に汝等何事も姫が心に背くなと。云ひすて奥に入りける。かくて實方太刀丸は夜も更けたる事なるに。門外に佇み先づ一節をぞ。鳴ら

さる。いたはしや瑠璃姫は。巫女廟の花かつ濁み枕に近き波の音。千島しば鳴くも。涙を添ふる媒なり。だ明暮は中將の御事のみ思ひくづをれ給ひ

つ。スエテ伏みおはせしが。誠に盡きぬ機縁にや笛の音胸にひしくとそ。かしく思召し如何に女房たち。今の音色

を聞給ふか。扱面白やちと  
 ちと聞かまほしくとありけ  
 れば。女房共承り何をかな  
 と存じしにそれ此方へと表  
 に出で。只今鳴らせし物の  
 音は御邊達が吹きけるか。  
 何處の人にて何といふ鳴物  
 ぞ。妃様より御聴聞あるべ  
 きとの仰なり是へ〜と讀  
 すれば兩人共入り給ひ。我  
 我々は薦僧と申して日本の  
 修行者なり此の竹は尺八と  
 て我等が法の掟にて。修  
 行の袖のならばはしなるが。  
 南風なまかぜに放されて。此の島に  
 寄り候妃様の御所望ならば。  
 いで一曲と打連れてオクリや  
 がて奥にぞ入り給ふ。瑠  
 璃姫立出で見給へば。戀し  
 ゆかしの中將殿弟の太刀丸。



あらぬ姿に瘦せ黒み目も當  
てられぬ有様なり。こはそ  
も誠か夢なるかと三人目と  
目を見合せて飛立つ程に思  
へども。人目の關に忍び音  
のヌエ袂を絞らせ給ひけり。

女房達不審をたて御涙の風  
情いぶかしさよと言ひけれ  
ば。瑠璃姫さらぬ振にも  
てなし。いやなう不審尤  
なり日本の人と聞きし故故  
郷ゆかしく。思はず涙をこ  
ほせしぞや。あの修行者  
に酒を盛り。方々も酒宴し  
て憂きを澆がんそれくと  
ありければ。承り候とて銚  
子土器携へて。暫し酒宴  
ぞ始まれり。中將も上下さ  
ざめき打交りさいつさゝれ  
つ飲む程に皆々打解け



各臥所ふしどに入りにつけり。しすましたりと人  
人ははらくと走り寄り。三人手と手にす  
がり付き、泣くより外の事ぞなき。中  
將ちゆうしやう仰せけるは好き時分なり敵はいづくにあ  
るいざ斬入らんと宣へば、瑠璃姫暫しと押

鎖め。此の國は人間ならず皆眷屬は外道に

て宙ちゆうを翔り水を潜り睫毛まつげに巢ねをくふ術を得

たり。其の上安國帝かんとくの御判を持ちたる故。

眷屬くわんぶく崇まへ奉る。さり乍ら下道共は遙か彼

方の無人島といふ處へ猪狩ぶたがしに参りしなり。

よき折柄にて候へば密ひそかに討取り給ふべ

し。いざ此方へと奥に入り障子をそつと明

け見れば。宵の酒に酔ひくたびれ前後も知

らず臥してあり。人々悦び太刀抜きそばめ

左右に立ち如何に安國。藤原の實方菊池太

刀丸なるが大事の敵を持ちながら。かく不

覺には見えけるぞといふより早く實方は太

刀振上げて弓手の肩先より馬手の乳の下か

けて切付け給へば。太刀丸も親の敵覺えた

かと首宙に打落し。返す太刀にて止めを刺

し。さあ今こそ本望遂けてあり片時も早く  
此方へと。川邊をさして出で給ふ。然る所  
に眷屬の大將大とん外道は内々姫に心を  
かけ折もがなと思ひ無人島より只一人。密  
に忍び歸りしが。姫君を見るよりも願ふ

處と悦び。稻妻の如くにて姫君を引立て行

く。人々大きに驚き。騒ぎ。跡を暮うて

追つかけ行くさる程に。大とん外道は

姫君諸共神通自在の風車ふうぐるまに乗り虚空遙に翔

り行く。然る處に有難や愛染明王虚空に

現れ出で給ひ矛を振上げ大とんが眞先に

向はせ給へばこは敵はじと取つて返し逃行

く處に。實方中將明王の御加護にや。夢と

もなく虚空の風車に乘じ給ひ跡を暮うて

來りしが。姫の車に乘移りやがて肩に打

かけて。元の車に移りしは不思議なりける

次第なり。其の後に明王は降魔の

矛をおつ取りのべ大とんが胸中を十文字に

突き貫き。くるりくと振廻し高々と差上

けて。利劍を抜いて首ふつつと切落し。奈

落に沈め猛火は光を放つて失せ給ふ。佛法  
不思議有難き。時刻移さず都より御迎ひの  
人々雲霞の如く馳來りさんざめかいて御歸  
洛ある。千秋萬歳萬歳々々めでたしとも申  
すばかりはなかりけれ。

竹本義太夫直正本

貞享二乙丑歲正月吉日

新板